

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和2(2020)年
8月号
通巻600号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和2年8月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



綿の実 岡山市 矢部顕さん撮影(文・7頁)

昭和48(1973)年8月13日 東光大祭法話より

死んで行く者の集まり ―百年たらずを仲良く―

法主 矢追日聖 (満61歳)

大倭に来て墮落しても知らん

今年はどういう加減か一か月以上雨が降っておりませんので、今日の東光大祭も何とかして雨が降ってくれないかしらんといい気持ちだったんですが、幸か不幸かカンカン照りの一日になりました。これはもう天の気でございますので人間ではどうしようもない、神さん任せで私達は付いて行かなきゃならない。人間はそういう宿命になっておるので、雨が降らなくても何とか生きていくことを考えなければなりません。

この場所(※旧拝殿)は前に池があるので少し涼しい風が入ってきますが、今日は蒸し暑いし屋根が低くて貧弱ですから温室みたいに蒸れます。しばらく辛抱して話を聞いてください。

最近、月次祭ではほとんど法話をしておりません。もう十年以上同じ話を繰り返してきて、ちょっと自分でも飽きておりますし、一方的に話を聞くよりもあなた達自身で考えることのほうが必要だと思っております。同じことばかり十年二十年しゃべっておれば聞く側にしてみれば、ああ、また今日も同じことしゃべってはるなあ、これで終いなんです。何のための話やら何のための信仰やら、害あって無益ということになりますので話をすることは中止しようなわけです。

ここ八十年、十五年、二十年も来ている人がありますが私の話を聞いて、じゃあいつべん、そういう心境や人間になっ

てみようとする人がどれくらい居るのか、情けないことです。がほとんど無いのです。

会場では真面目な顔して聞いてはるから、みんな一生懸命に人間向上のために聞いてくれているのかとこっちはアホみたいにしゃべっているんです。それで尋ねますと、あれは話としてはいいでも聞いているけれど、法主さんやから来るんでワシらには出来ないと言われない方が多いんですよ。それなら初めから聞いてくれない方がマシです、余計なことをしゃべる必要もないし。

それじゃあ宗教みたいなものは無いほうがいいと辞めるわけにもいかない。私には使命があるし宿命がある、だから効果を狙わずにやっている。人がついて来ても来なくても、分かってくれてもくれなくても、やらなければならぬからやっているだけであなただのためではありません。

だから大倭に来て墮落しても知らん。あるいは神さんを信仰しながら悪い心を起こしても、私の責任ではありません。自分の責任だから、宗教の仕事はしていますが、ここへ集まってくる一人一人の心の世界にまでは責任は持てないです。本当のことを言えばそうなのですが、またまあ、私の言った通りに出来るような者はなかなか居ないものですしね。

一 大事の因縁

私の六十歳を越えるまでの人生経験や身に付いたものを話しておりますが、自分自身の通ってきた道で、見て体験した以外のことを言っていない。本や学説を読んで勉強した知識だけで、あなた達に講義してるんじゃないのですよ。

『すさのお』紙に連載している「大事の因縁」(野草社刊『ながそねの息吹』所収)には、生い

立ちや育ってきた家庭環境とかを書いております。まあ疑いたくなるようなところもあるかもしれませんが、本当のことなんです。

これは父親と母親の供養のために書いています。というのも小さい時分からの家の成り立ちももう誰も分かっていない。生き残っているのは私だけなので今のうちに活字にしておけば、後の者や大倭に集まってくる人達に過去の足跡を分かってもらえるし、またこれを読んで自分の身に成える人も世の中にはあるはずだからです。

私の祖母は、世間のことを一切無視して一生懸命に神さんのおっしゃる通りに一生を終えた。それに対して祖父は、世間の常識を中心に考え神さんに逆ろうてきた。一方は神さんに従い他方は神さんに逆らった二人の晩年が、結局は同じことだった、順逆一如であったことが、これを読んでもらえば分かります。

普通、信仰したら家の中が上手く行くだろうとかご利益がもらえるか、この神さんを拜んだら病気を治してくれるかというような目先の小さい思惑のためにお縄りするんですね。これはまあ人情ですが、なんば頼んだところで死ぬ時は死ぬんです。

うちの場合は、一生懸命に信仰した者も神さんに全く反対した者も、結果は一緒ということを書きました。そこにはホギヤアと生まれた時から人間一人一人に深い大事があるということです。例えば茄子を土に植えたら何か月世話をしてもどれだけ肥を置いても胡瓜にならない。私は茄子は嫌やから胡瓜に変えてくれと百万陀羅(※何度も繰り返すこと)お題目を唱えてもどないもならん。人間もあだやおろそかに生まれるのではなく、その人にはその人なりに持つて来た大事の因縁があつて世の中に生まれて来る。仏教でも特に法華経はそれを強調しています。

それをもう寿命が尽きて死ぬ運命が来ている時でも神さん仏さん助けてくださいと言う。カッと死んでしまうたら、どうもしゃあないな、葬(お葬式)してやるわな。まあこれはそれでよろしい、自分の気慰めですな。

分かりやすく言えば、神さんにこれだけ頼んだ、やれ医者にこれだけ掛かった、それでもあかんかったと諦めるためにやってくるだけなんです。死ぬ人は死ぬ時には死ぬんですよ、良うなる人は良うなります。それを疑うんやったら法華経なんかは全部嘘ばかりです。お釈迦さんも死んでるねんで。あなた達も自分の目先のことばかり考えないで、どこに大事の因縁があるのか深く考えないといけない。自分の得手勝手なことばかり考えていたら終いに罰が当たる。

私の家の歩み方にも宿命というものがあります。父親は世間なみの常識があり、それを外したら信仰は成り立たないと、祖母や母親の気遣いじみたことには極力反対した。反対した人ではあつたけれど、いざさて厳罰が当たるとなると父親に当たったことはないですよ、逆に生母さん(※母親)に当たるとある場合がある。それでいつでも「当てるのやつたら俺に当たたらええやないか」と笑っていた。一生懸命に神さんを拜んでる方に罰が行つております。我々人間には一体どうなっているのやら分かりません。

その辺のところは、ま、分からなくてもよろしいけれど、宗教とはどんなものか、自分が本当に信仰しておるのかどうかを反省するのが今日の東光大祭というお祭りであるんです。暑い中、時間を割いておいでになつておるのやから、同じことを何べんも繰り返して言うてる私の話が、あなた達の心の栄養になつておるかどうか自身の心に問うて考えてみてほしい。

物事は変化する

今の時代に宗教というものを修行する場合、イエス・キリストや釈迦などをお手本としたり、あるいは宗派の宗祖たちの書かれた教典に沿っておるんです。ただし新幹線も自動車もないし、草鞋で歩いていたような社会情勢の中で説かれた内容を、そのままそっくり今の時代に持つてくると当てはまらない。けれども説かれておる心は、現在も一緒です。説き方は変わっても心の世界は昔も今も変わらないのです。

では、そういう偉い人が何を考え説いているのか、分かりやすく言えばそれはみんなが幸せになることです。仏教で言えば、仏の慈悲は平等であつてどんな人間も救われるのだ、みんな極楽浄土へ行けるのだと説明しております。たとえ草木一つでもすべてが仏になる性を持つている、「衆生仏性有り」であつて差別はないと説いております。

釈迦のおられたインドではきつちりと階級ができておつた。階級の一番上の王さんはそれよろしいけれど、一番下の階級は人間扱いしてもらえない。同じ人間に生まれて来ているのに人が勝手にこんな不平等をする。そこで釈迦さんは人間は平等に行かなきゃいけないと平等観に立たれるのです。仏教は、俗にお経と言つてる経典や木仏金仏の偶像と共に日本に入つて来ているんです。

お盆には卒塔婆(塔婆)に戒名を書いて供養したらさあつと極楽の風が吹いてどんな罪の人でも極楽に行けるように坊さんは説明するけれど、お釈迦さんが言うてはるのは違います。お釈迦さんが言われたと檀家に説かしているのにこんなこと言うたらすまんけど。

お釈迦さんが生きてはつた時にはまだ教典が無

かった。お釈迦さんが亡くなられて百年、二百年、三百年の後、お経は出来上がつていったんです。その中身はインドで結集されたもので、それが中国へ入つて聖者や哲学者、立派な人たちによつて中国流に書き換えられた。日本人は漢字が読めますから、中国で書き直したものが日本仏教の教典になるんです。

塔婆はストウパー、塔という意味です。薬師寺の三重の塔、興福寺の五重の塔のあの塔です。卒塔婆は板みたいなものになつていますが、塔婆の最初の起こりとは違います。

お釈迦さんが亡くなられて茶毘に付されたあとのお骨を舍利と言つたのですが、弟子たちがあちこちに分けて持つて行き、初期の形式では土饅頭のようなお墓、塚が作られた。すると帰依していた信者たちがね、あなた達も知つての通りインドは暑い国ですから、お釈迦さんが暑いやろうと塚の上に傘を一つ載せる、またこっちの人が傘を載せる。塚の上に傘が重なる、その形が塔の形になるわけやわね。また塚のところに人がぎょうさん集まると恐らく臭いし、インドには白檀とか色々ないい匂いのする木があるからそれを蒸したわけですね。今あなた達が手向けの線香がそれなんですよ。

法隆寺でもどこの寺でも、塔の一番下にはお舍利さんが入つていて、その真ん中に心柱を立てて、上に傘を着せているのが五重の塔ですよ。ご本尊は塔の一番下、土の中に入つている。

お釈迦さんの肉体の舍利を信仰するのは仏教の一番古い時代の形ですが、その後哲学や教典が作られ、ギリシャやローマの方からは色々な芸術がインドに流れてきて仏像が作り出されます。そうするとちいちゃなお舍利さんを埋めた塔のところで拜んでいるより、金ぴかのお釈迦さんの姿の前で拜むほうが気持ちがいいので像を祀つて建物

を付けた。それが金堂です。法隆寺では釈迦の骨の信仰である塔と、姿の信仰である金堂とが同格で並んで建つています。

塔婆に戒名を書いて天王寺さんの亀の池に流せば極楽に行けるとかいうのは、まあ後の坊さんの小遣い儲けのために言うたことなんでね。それでも悪いことはないから構わないのですが、物事は全てそういうように変化するという事です。

自分のお役目を考える

大倭で宗教と言つているもの、私が話していることは、仏教の入る前の農耕時代の信仰の現代流・現代版です。

みんなが仲良く行こうというのが日本の古代の宗教なんです。神さんはみんなの上に居られて、みんなを生かして育ててくれる。天の神さん地の神さんを拝み、一つの集落が一軒として一緒に働き、農から採れたものは分けて食べる。これはワシのものやこれはお前のものやと浅ましい取り合いをすれば神さんに叱られる。生かされておる間は、息が切れるまで幸せに行こうやないかと、これが日本の古代の宗教の原型なのです。

ところが世の中が下つてくると所有欲が出てくる。権利欲・権力欲で人間がだんだん悪く染まってきたので、色々な説明の方法で宗教も変化してきます。けどそんな説明の方法で宗教も変化して話をして人間がコロッと変わることは恐らくないでしょう。私は三十年近く大倭でこれをしゃべっていますが、人間的に変わったというのがそうは居りませんもの。

やっぱり狸は狸、狐は狐、そういつぱんに変わるものやないけれども、大倭で話を聞いておくだ

けでも何かしらの利益になつとるんですよ。茄子を捕まえて胡瓜になれというのは私は嫌ですしね。それよりもこうして生かされていることを自覚して、神さんから授かった何かのお役目があるだろうと自分で考えて欲しいと思います。

みんなにお役目はあるとは言うても、例えば人間の皮が顔から足の裏、ケツの穴まで同じやったらこれはあきません。顔の皮が足の裏に付いたら、血が出ますよ。足の裏の皮はいくら歩いて減ってもどんどん出来てくるようでないとい具合が悪いし、化粧してもらえらるから顔の皮になりましたかもし知らんけど、年がら年中濡れている口の皮を顔の皮にしたら腐りますよ。

そういうようにみんなが部分部分で、その人なりに与えられたお役目を持って生まれてきているのです。その自覚を持って、小さく言えば自分の家庭・家族あるいは住んでいる町や村でもいい、その中で利害関係などで争いを起こさずに古代日本の社会のように行つてほしい。

どうせこれみんな死ぬんですよ。死んで行く者ばかりが集まつてるねん。百年足らずの人生やから仲良う行こうやないかと、そんな割り切った心境になんてならへんのかなと思う。千年も生きるのやつたらねえ、けど、やいやいやいうたかて人間みたいなもの百年足らずですよ。

神さんの法に従つて

世の中の人々が、物心ついて二十歳はたらぐらいから我が世になって、嫁さんをもらい家庭を持つて五十年と見たとしても、もう七十歳でっしやないか。それでどうたく(※強情・ごんた)張つとつたら若い者に笑われて老いばれて死んでいきますねん。いらんと言つたつてそうなります。そういう

ような人生のことに取り組んで考えるのが宗教の世界なのです。

ここに居る尾崎のおばあちゃんも最初に会った時は若かったし、ピンピンしとったわ。で、こないなつてるもんなあ。私もこんなに白髪しらがになつてもうたがな(誰かから「男前やったし」の声、笑)。否応なしに、自分の意思に添うても添わんでもそうなつてしまふのが神ながらや。これは神さんの力やからしかたがない。我々は生かされておるのやから、どうしても抵抗できないんです、神さんの心に従わないといけない。夏になつたら裸になればいいし、冬になつたら温めたらよろしい。これが一番身近な神さんの法に逆らわんと従うてることです。

一年一人間は歳はいくし老化していくのに、何で心だけ若い時のことばかり考えるのかなと思う、不思議でかなわん。どうせ死ぬのやもの、息子や娘とかに嫌われないで死ぬことを考えてみたらどうかと思うんです。うちの老人ホームを見ても、明日死ぬような歳をして憎たれ口をききよる。若い時と同じ気持ちで頑固張つて、若い者と対々で行こうとしてね。世間のおばあちゃんでも嫁さんいじめたろうと思つたら(笑)、嫁さんの上を行こうと毎日神経使う。しんどい話やね。そんなつまらんとこに自分のエネルギー使つて、ボケたら小便垂れ流して嫁さんに尻ビシャーといかれんならん。(笑)

そうならないように六十になつたら六十の、七十になつたら七十の歳に依じて、どうすれば若い者が我々の代わりを気持ちよくやってくれるか考えて、いいおじいちゃんおばあちゃんにならなありません。そのようなもの考え方をしていくのが神ながらの宗教です。

なんばお釈迦さんキリストが偉いというたかて

ね、この白髪は黒くしてくれはれへん。やつぱり宇宙の神さんには勝たれません。そういうことをお互いに自覚していくことも「まつり」というのです。

「まつり」の意味と弥栄踊り

「まつり」とは大和言葉で、神さんの心に従つて行く「まつろう」(※順応する)ということ、また「待つ」という意味が入つてゐるんです。

大倭で何かの祭りをする時には全国から神さんが集まつて来ています。目には見えない霊界の方々、いわゆる固有霊ですね。あなた達の先祖さんもそうです。形のある我々は、こちら側で待つておるわけです。お正月の雌松雄松の門松でも、天の神さん、先祖さんが寄つて来られるのをみんな待つてますよというつもりで門口に立てるんですよ。

神さん先祖さんの心に自分が付き従つて行くことを、「まつらい」「まつろう」と言います。そうして集まつて来ると和気あいあいとなつて、みんなでも話しても踊つても何をしてもかまわない、冥みよでもしてワアワアと普段の鬱憤うづみをバアーと晴らしてお互いに愉快に過なほらすこと、これが「まつりごと」、いわゆる直会なほらです。待つこと、まつらうこと、集まつて事をするという意味を含めての行事がお祭りです。

この「まつりごと」というのは政治にも通じるんです。人間社会において皆が寄り集まつて、国の中を平和に上手に治めることなんです。今でも政まつりごとと言いますわね。

今日の東光大祭は、昼の間、みんなでこうして神さんまつりごとを拝み先祖さんにも集まつてもらつて、夕方からは共に弥栄踊りを楽しもうという日です。

弥栄踊りは今年で六回目になります。字では互いに弥栄栄えて行くと書きますが、いやさかの「い」は包んでおく言葉で音に出さずに「やさか」と読む古い言葉です。京都にある八坂神社も元々は「やさかえる神社」ですがそれを昔からやさか、やさかと言うて八坂の漢字を使っています。

仏教であれば回向供養をすれば功德になり霊界の人が救済されると説きますが、大倭ではここに集まった縁のある万霊が、死後の世界で上手く行つてもらおうとか成仏してもらおうとかは関係ないのです。成仏しておつてもおらんなくても地獄に落ちておつてもおらんでも、どこにおつてもかまわないんです。あなた達の血縁や関係のある人が、今日はお祭りやからその縁の綱によってここへ出

親子海浜留学を終えて

大阪府箕面市在住 梨花



『南の島からこんにちは』と題して、親子海浜留学制度を利用し暮らすことになった奄美群島の加計呂麻島での雑感を寄稿してから三年近くが過ぎます(平成29年『おおやまと』11月号)。

在日朝鮮人三世として東京で生まれ育つた私に帰りたい場所としての故郷が出来たことは有難く、また『われわれはどこから来て、どこへ行くか』として居るのか?と大倭で以前講演された関野吉晴氏の問いを考え続ける上でも貴重な時間でした。

そして、この春、娘の進学に伴い大阪に越してきました。(写真上・島での別れ/下・箕面の桜)

て来ている。だから、みんなと共に先祖さんも遊んでもらおうというのが大倭の先祖供養です。死んで地獄のように苦しんでいる人も、死んで気楽な人もおります。どんな人もおるけれど、血の繋がっている先祖とあなた達子孫の縁というものは切っても切れないものがあります。だから先祖さんの御霊と生きている人間が集まって楽しもうというのが今日のお祭りの意味なんです。それをよく心得てみなさんもゆつくり遊んで頂いたら結構だと思います。

ちようど時間だからこの辺で置きます。暑いところご清聴ありがとうございました。(文責・編集部)



＊

実を言うと、京都から島へ越した当初、期間限定ではあつても島に来たことを人生最大の過ちではなかつたかと後悔しました。娘が通い始めた中学校から帰ってきては、「こんなところいやや、京都に帰りたい」と数日泣き通していたからです。娘にとつてよい経験になるだろうという漠然とした期待があつたとはいへ、本人が嫌がるのならあつさり過ちを認めた方がいいと半ば本気で夜逃げの策を練り、眠れぬ日が続きました。

それがこの三月、引越し作業の間にしじみみと娘がこう言ったのです。「ほんまここに来て良かったわ。あのまま京都におつても楽しいこと

はあつたやろし、それなりに成長していたとは思うけど、今みたいにはなつてへんかつたと思うわ」。今みたいに、つまり、自分自身でも感じる「遅しさ」を身に付けたことは、島に来たからこそだと感じたのでしょうか。

＊

そのおかげか、せっかく入学した高校がオンライン授業でのスタートになった時も冷静に受け止め、今度は「島がいい、大阪はいやや」とは言いませんでした。島での豊かな時間があつたからこそ、未知の世界へ好奇心を持って飛び込むことが出来たのでしょう。

一方で大人は、成長期の子どもが周囲の環境をダイレクトに受け変化するには、そうそう大きく変わるものではありません。やはり長年しみついた考えや行動の癖は住場所を変えてもついてまわります。時間があれば畑の手入れより読書を優先し、鼠とりも隣のおじさんに最後まで頼んでいた私です。

とはいへ、島暮らしの三年の内に東京に暮らす母と兄を亡くし、悲しみの淵に追いやられた時、自分なりの乗り越え方を会得出来たのは、島での日々があつたからだと言えるでしょう。生死の循環が島にはそこかしこに存在しています。また、何でも自分一人で解決しようと頑張らなくてよい、他人に頼つてよいのだと身をもって教えてもらった三年間でした。

母がくも膜下出血で倒れ、亡くなるまでの七カ月余、当時中学一年生だった娘を一人残し、毎月東京へ見舞いに行けたのも、頼れる集落の人がいたからです。

都会の人間は冷たく、田舎の人間は情があると仰いだいではありません。お金があれば人に頼らずとも生きていける街の生活には、やさしさを

発揮する場が限られているからだとも言えるし、反対に、不便を強いられ、台風の通り道でもある自然環境が厳しい離島では、お節介を焼いて焼かれてなんぼという暮らしが必然だからとも言えるでしょう。

理由はどうかあれ、気が楽なのは後者です。

ある日、仕事に出かけようと駐車している広場へ行くと、車の陰にしゃがみ込んでいる観光客の女性に気づきました。次のバスが来るまで三時間以上あります。喫茶店もなく暑さにまいていたというので、鍵はかかかっていないし冷蔵庫に飲み物もあるので休んでいって下さいと、私は自分の家を指さし、そのまま職場へ向かいました。帰宅するとお礼のメモと、ゆっくり休みながら編んだというシュシュ(髪ゴム)が置かれていました。些細なことですが迷わずにそんなことを申し出た自分に驚きます。助けてもらった経験があれば、「一人に親切にしましょう」という標語を掲げずとも人間そう出来るのだと実感しました。

娘は小学生の頃、私の帰宅まで駅前に出て道行く人を眺めて過ごしたこともあったようで、島に来了頃、「ここは人がおらんくてめっちゃ寂しい」と言っていました。それが数カ月後、母の見舞いで東京へ行った際、信号待ちしたスクランブル交差点で、「お母さん、誰も知っている人おれへんなー。人は多いけど、なんか今はこっちの方が寂しいわ」と呟いていました。買い物などのために月に二、三度奄美本土へ渡るフェリーの港では見知った顔ばかりで、「どこ行くの?」と声をかけたらもう日々だったからでしょう。

*

大阪に越してからすぐに緊急事態宣言が出されたため引越挨拶もろくに出来なかつたという理由もありますが、知らない、知り合うきっかけ

がないことから来る不安や怖れを経験し、逆カルチャーショックを受けました。以前はそれが当たり前だった「隣は何をする人ぞ」という生活は、煩わしい近所付き合いを回避できる反面、扉だけではなく心にも鍵をかけることとセットで成り立っていたのだと改めて気づきました。

環境が誘因の病は、ネット社会の現代では全国で差はないように思えますが、潮風の匂いや強烈な日差しが肌を刺す感覚、暗闇で耳にするフクロウの声を死を意識するハブとの対面など五感を刺激する場面が日常にある場合としては、物事の受け止め方や流し方が違っている気がします。

ま、いつか、そんなこともあるよね、と自分や他者を許し、底なしに貶めることはしない、そんな懐の大きさを島の人たちに感じました。「自分探し」ではなく、「人間探し」にもってこいの場所です。

しかしながら、島暮らしが全くのストレスフリーだったわけではありません。インターネットよりも速い噂話をいつも笑い飛ばすことは出来ないですし、多様な新しい考えに触れる機会が少ないので、昔ながらの価値観に異を唱えることは至難の技です。残したい暮らしの知恵と一掃したい悪しき偏見が混在しているという感否めません。

そこでいつも頭をかすめるのは、来年で没後二十年を迎える、亡父マル七太郎が口にしていた「個だよ、個」という意味に込められた「BE動詞への自信」論です。

大阪の下町、朝鮮人部落で生まれ育った父は、自然の美を讀める芸術家になるはずもなく、市井に生きる人々、世に言う「成功」とは無縁の人々を語り続けた芸人でした。その父の影響が大きいせいか、三年間の島暮らしは私にとって自然の美

しさや厳しさに触れたということ以上に、ヒトとは何とおかしく哀しい存在なのか、という視点からの記憶が色濃く残っています。

*

三年通った娘の中学の卒業式は、生徒減少のため創立百二十四年の幕をいったん閉じることになった日でもあります。PTA会長として私は二人の卒業生に向けてこう祝辞を述べました。

「先日ラジオで、子どもの学び場を主宰する起業家の女性がこんなことを言っていました。

『子どもがより良く成長するためには斜めの係が重要です』

何のことでしょう? (白い四角形の厚紙を見せて、ラインを指でなぞりながら) 縦の関係というのは、親と子、教師と生徒、そして横の関係は、(二人に目配せし) そう、友だちですね。どちらも大切なものだけれど、その二つだけでは、(手のひらに紙を乗せて離すと、はらはらと下に落ちる)、立つことは出来ません。そこに無数の斜めの関係が支えあうことで立つことが出来るのです。

ちよつと後ろを振り向いて下さい。斜めの関係であなたたちを見守る人たちがいらつしやいます。遠泳大会や運動会での声援、学習発表会での拍手、学校の行き帰りに挨拶を交わしたことなど色々と思ひ出すでしょう。「優幸、優幸くん」、『光希、光希ちゃん』、下の名で呼んでくれる大人が身近にいるというのは、今の時代、本当に貴重で有難いことだと思います。

そんな都会とは異なる環境で中学校生活を送った二人にとって、勉強は何のためにするものだと思いますか? 試験で良い点をとるため? 将来自分の希望する職業に就くためかな? 人によって答えは千差万別でしょう。

もう随分前に亡くなったマルセ太郎という芸人の言葉を紹介します。テレビなどにはあまり出ていませんでしたが、一人語りで全国を公演して回り、会場で配られたアンケートを書いてくれた人に一枚、一枚、返事を出していました。ある時、当時七歳だった女の子に宛てたハガキには、その子が読めるように全文ひらがなでこう書きました。

『がっこうのべんきょうもがんばってください。べんきょうをがんばるのはひとにかつためではありません。おとなになったとき、よわいひとのちびにたつてものごとをかんがえるようになるためです。つよいということはよわいものをいじめることではなく、よわいひとのためにたたかえることです。つよくやさしいひとになるためべんきょうしてください。』

私の父でもあったマルセ太郎のこの言葉に加えて、『王様は裸だよ』と大人になつても言えるためにも勉強して下さい、と伝えたいです。アンデルセンの有名なこの話、知識や経験が豊富な大人たちが口に出せなかつた真実を堂々と叫ぶことが出来たのは、純粹な子どもだったからでしょうか？ だとしたら、彼、彼女が大人になつた時、同じ過ちを繰り返してしまうことになりませう。そうならないためには、勇気を伴うかしこさを身に付けなければなりません。

四月からの新天地では、縦横斜めの関係をより広く、より強く結んで、高校ではなお一層貪欲に学んでいって下さい。

この三年間、二人の頑張りや成長を見ることが出来て幸せでした。卒業おめでとう！

嵐の中、小型船エリザベス号で旅立ち、島では見られなかつたソメイヨシノが美しく迎えてくれた春でした。

表紙写真について

「儉約令の立て札」と糸紡ぎ

岡山市 矢部 顕

江戸時代末期の「儉約令の立て札」が近所の旧家で発見（2013年）されたのですが、ほとんどびっくりしました。その後、その「立て札」を見せながら小学校（6年生）の歴史の授業を行いました。

この「儉約令の立て札」の最初の文はこうです。—当村（沼村）は昨年と今年の水害で百姓はたいへんに困窮している。（中略）そこで左記のように儉約を申し付ける。—（以下、条文）

「立て札」に書かれている条文のひとつに「綿の商人以外は村に入ることを禁じる」というのがあって、沼村は商品作物の綿を栽培していたことがわかります。（沼村は、わたくしの住まいしているところで、今は岡山市東区沼という住所です。）

江戸時代の綿栽培については、何十年かぶりに『カムイ伝』（白土三平著）を読み返し勉強しました。学生時代に読んでたいへん感激し、多くの友人に薦めた記憶があります。全巻を揃えていたのですが、あちこちに貸し出しているうちに、いつの間にか失くなってしまいました。いま読みかえしても凄い漫画、というか鋭い歴史書です。

「儉約令」が江戸時代末期に何度も発令されたことは、ペリー来航と関係があることを初めて知りました。ペリー来航のようなことが、今後たびたび起こることを予想して幕府は各藩に対して三浦半島や房総半島の沿岸警備を命じたのです。各藩は兵隊を派兵するために出費を強いられますので、年貢の取り立てが滞ることを恐れたようです。それで「儉約令」の頻繁な発令となったようです。

「ペリー来航」は歴史で習いましたが、「なぜペリーは日本に来たのか？」を習った人はいるのでしょうか？ そのころ日本近海には200隻以上のアメリカの捕鯨船が操業していたが、目の前に見える日本列島の港に入港すれば水や食料が手に入るのに鎖国政策でそれが出来ない。アメリカの捕鯨業の利益のために、つまり当時のビッグビジネスのためにアメリカ政府が行った脅かしだったのです。いまアメリカは日本が捕鯨をすることを非難していますが、当時は最大の捕鯨国だったのです。まあ、そういうことをわたくしは小学校の日本史で語ったのでした。

次の時間には、実際の糸紡ぎ体験です。綿から糸を紡ぎ、機織りで糸から布をつくり、布から衣服をつくる、という、江戸時代から昭和15年くらいまで行われていた村の暮らしの一部の「糸紡ぎ」を経験させました。

各自にあらかじめ材料を渡しておいて自作した紡錘車（スピンドル）で糸紡ぎに挑戦しました。どのようにするのか実際にやって見せなければなりませんので、練習しましたが、コツをつかまでけつこうたいへんでした。クラスで2〜3人は初めての体験なのに上手にできる子がいて驚きました。

江戸時代にこの辺りで綿を栽培したのは、綿から何を作るためなのか？ 「綿糸をつくるためだ」と思う人？」と問うたら、ひとり手があがりました。冗談が通じる子だったのか、どうだか……。

畑に綿の種を蒔いてみました。やがて1・5mくらいに成長し、花が咲き、実がなり、その実がはじけて、白い綿が出てきました。綿があらわれたときはなかなか感動的でした。綿の木を小学校の校舎横の花壇に移植して、綿が出来る様子子どもたちが見ることが出来るようになりました。

あじさい日誌

7月15日 大倭神宮月次祭。

7月23日 大倭大本宮月次祭。

この日は、昭和37年7月23日の月次祭法話をお聞きしました。(平成17年9・10月号に「現代における宗教改革とは」として掲載分)

午後4時から大倭会館で大倭会の役員会が行われました。

会議の開始前に、役員の一で闘病中の杉浩史さん(大阪府茨木市)が、娘さん夫妻に付き添われ挨拶に来られました。

8月3日 あじさいの箱の習字教室の皆さんが大倭会館の大掃除をしてくれました。

8月4日 午後2時から教務本庁で本紙編集会議。8月号「あじさい日誌」の締め日が大倭印刷の夏季休業のため、7日にすることに(原則10日)。

8月6日 広島に原爆が投下されて75年。午前8時15分、拝殿の大太鼓が李章根さんによって打ち鳴らされました。原爆供養塔に納められた遺骨の身元を探して、遺族の元に戻し続けた人がいました。故佐伯敏子さんの言った「死者のことを忘れないで」という言葉を思い出していたとのこと。

午後2時より大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

8月7日 教務本庁の電話回線工事の下見があり、大掃除も兼ねて机周辺の物を大移動。

猛暑の立秋。時折、ツクツクボウシの声も混じります。

大倭安宿苑では

(菅原園)

7月11日 美容師さん来園、男女ともカットしてもらい、おしゃべりも楽しみました。

7月12日 コスメサークル。5名が集まってお化粧やパック。

(須加宮寮)

7月13日 阪本理容による男性の散髪。久しぶりでした。

7月21日 昼食はかき揚げそば

令和2年度大倭会行事の延期のお知らせ

10月24~26日の佐渡への文化行事の旅と、11月8日の馬場康彦氏(宮城県気仙沼市唐桑町)による文化講演会を、来年度以降に延期することを、大倭会役員会に於いて決定しました。新型コロナによる世界的な危機が少しでも早く終息することを願いつつ、お知らせいたします。

か、かき揚げうどんを選択。
7月30日 地域清掃で東方の碑周辺の清掃を行いました。

(長曾根寮)

7月13日(デイ)色とりどりのアサガオを折って壁飾り作り。

7月18日(特養)写真で七夕や天の川、花火を楽しみました。

(茂毛路園)

7月28日 定例懇談会。参加者7名が施設長とお話ししました。

(八重垣園)

クラブ活動は現在も中止。ラジオ体操には、ほとんどの方が毎日参加されます。

あんない

*東光大祭及び祖霊祭

9月2日(水) 左欄に詳細。

*月次祭(大倭神宮)

9月6日(日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第660回祝会

9月13日(日) 中止とします。

*月次祭(大倭神宮)

9月15日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)

9月23日(水) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

東光大祭 祭典のご案内

令和2年9月2日(水曜日・旧7月15日)

午前11時30分から、東方の碑で加美さまにご挨拶。

正午から、奥津齋庭において祖霊祭が行われます。

祖霊祭が終わり次第、拝殿に教長さんをお迎えして

東光大祭が行われます。

祭典後、皆様各ご家庭の経木をお渡しします。

祖霊祭の間、拝殿では法主様の東光大祭でのご法話や紫陽花色の記録映像等をご用意します。

お願い 当日の密集・密接を避けるため、後日、お越し下さる方の経木は拝殿で預かりしておきます。皆様のご協力をお願いします。

編集後記

▼昭和41(1966)年1月23日「すさのお」第1号が発行され、昭和51(1976)年1月23日通巻100号で「おおやまと」に名称を変更しました。年数では54・55年間、途中、休刊も合併号も、間違いもあるのですが、今月号で一応600号となりました。

▼多くの方にいろいろな形でご協力頂いています。広島県大崎上島の中本好子さんにはいつも法話の文字起こしをお願いしています。その彼女からのメールです。「7月号、ありがとうございしました。届くとやはり嬉しいものです。あじさい日誌の6月26日の徳田典子さんは、得田さんです。また、住所も群馬県でなく埼玉県熊谷市です(後略)」。まあ、傷は浅い!なんちゃって。(典子さんごめんね)

▼「広辞苑」など、間違いを指摘すると記念の品をもらえる?とか。本紙もそれにならうことに致します。皆さん、どうぞよろしくお願致します。(春)

訂正 この7月号の「人間的に向上するよう自分を錬磨していく」として掲載した法話は、正しくは昭和41(1966)年7月23日月次祭の時のものでした。法主さんの年齢も満55歳となります。昭和51(1976)年というのは誤りでした。